口之津港の町並みと建築意匠

村　田　明　久*

Street and architectural design in Kuchi-no-tsu Port

MURATA Akihisa

Abstracts

The development of Kuchi-no-tsu as a trade port in the Meiji and Taisho Periods made the architecture of the Customs House, Mitsui & Co. Ltd. Branch Building banks, red light district, emigration neibourhood opulent place did street wealthily. More than 60 buildings constructed before the early Showa years were identified in the port and environs. These buildings are characterized by the variety of architectural design. The "iron picture" is particularly indicative of the former prosperity of the port.

1．はじめに

口之津港が最も栄えていた，明治の主要道路沿いにある昭和戦前期以前の建築と考えられる建物を取り上げて，その中の特徴的な建築意匠と外観について考察した。

平成3年の科研調査の時に現地を訪れて，近代港町の町並みの存在を確認していた。長崎県には珍しく鏝絵や破風飾りの盛んな町並みが見られ，明治期に繁栄を極めた地方港町の賑わいの姿をうかがい知ることができた。

平成9年から調査を行い，ゼミ学生の大城南海，滝下理津子の両名による卒業研究としてまとめた(注1)が，その時はもう港の埋め立てや新設道路が開通し，町並みはとぎれ，なくなった建物もあった。今回取り上げる細かな建築表現はもう風前の灯火で，この機会に再整理して出稿することにした。

2．口之津港の町並み

2－1　地域の概要

口之津港は永禄5年（1562）に開港して以来，三池炭鉱で知られる大牟田に三池港ができる明治42年（1909）まで，貿易港として発展してきた。早崎海峡の難所をかかえた有明海の要衝にあり，潮待ち風待ちする船の寄港地として江戸時代から知られていた。明治になって官営直営事業の三池炭鉱の三池炭海外販売権を三井が獲得，やがて三池炭田を手に入れ開鉱したおかげで口之津港には出入の船舶が増え，人口が急増し，町の賑わいを呈するようになった。当初の輸出は大牟田→口之津→長崎→上海の経路であったが，口之津から上海へ直輸出できる体制としたのである。

明治11年（1878）に三池石炭海外輸出港に指定され，長崎税関口之津支庁が開設，三井物産長崎

* 工学部　建築学科　教授
2004年12月5日受付

支店口之津出張所が設置された。明治22年(1889)特別輸出港に指定，明治29年（1896）に外国貿易港に指定されて貨物の輸出入が激増し，明治30年(1897)に口之津税関支署に昇格，三井物産口之津支店に昇格した。明治39年（1906）頃は最も栄えた頃で，三池炭鉱の港（三池港）の外港の役割を果たし，島原半島の中心部として賑わっていた。しかし明治42年の三池港の完成で三池支店出張所に格下げとなり，大正11年（1922）にはこれまで口之津港に入港した船舶は全部三池港に入港となる。復興の努力は進められたが外航船舶の寄港は皆無となり，昭和41年（1966）に開港指定は取り消されて，明治22年以来の貿易港としての役割を終えるのである。

近世の口之津は，唐人町の「南蛮船渡来地」あたりが船着場であったが，文久２年（1862）に真米新田として埋め立てられた。

明治大正の口之津は，港町，木ノ崎，貝瀬の一帯が百年余りかけて明治29年に大屋新田として埋め立てられ貯炭場としても使用され，東大泊の琴平貯炭場は明治24年（1891）に埋め立てられた。この頃の町の中心は八坂町から東大泊にかけてで，東大泊，西大泊は当時の歓楽街であった。明治30年の貸座敷及び娼妓取締令の改正で苧扱川（おこんご：現在の南大泊）に集団移転して公娼の苧扱川遊郭ができ，木造３階建の豪華な建物が建ち並んだ。また明治32年に与論島，徳之島からの移民が中橋（港町），焚場（栄町）に与論長屋を形成した。

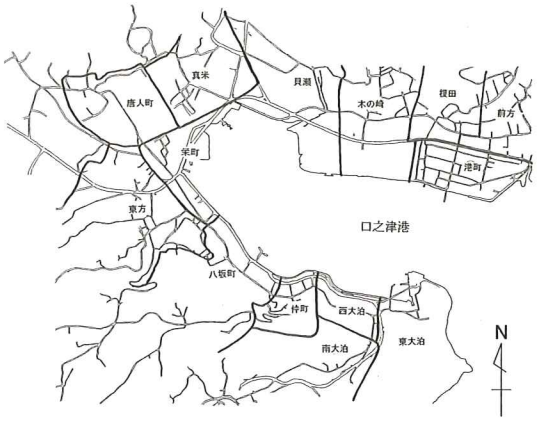

図１　現在の口之津港と周辺地区

現在の口之津は島原鉄道，国道251線が通り，町の中心は国道沿いの栄町，真米付近へと移っている。八坂町から大泊，早崎にかけては道路公園や駐車場を備えたシーサイドパークとして近年，道路整備された。

2－2　建築分布

調査範囲は口之津港沿岸の14の地区とした。範囲地図は次に示す。明治，大正，昭和戦前と見られる建物を当時の道路沿いに調査すると，該当建物は14地区に66件となった。分布図は次のようである。

地区別に見ると，全体の４割以上が東大泊と西大泊に集中していることが分かる。この地区は，税関があり最も賑わっていた地区である。

建物を様態別に分類すると，和風建築が58件，洋風建築が８件あり，圧倒的に和風建築が多いことが分かる。口之津港の近代港町であった東大泊，西大泊地区は，和風建築がひしめく町並みであったことがわかる。洋風建築は東大泊の税関建物以

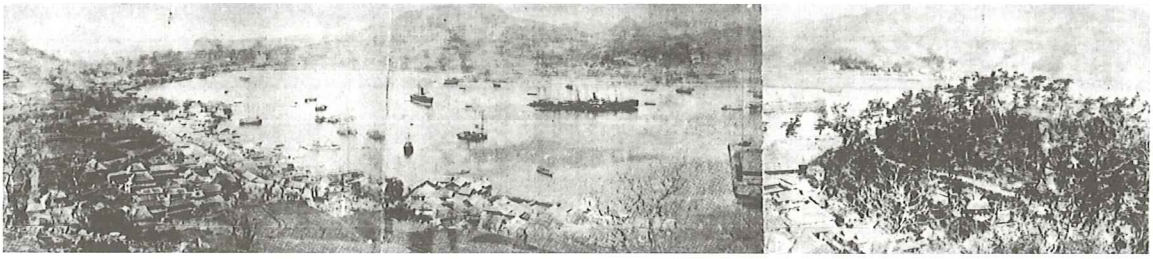

写真１　明治27年の口之津港（「口之津町史　郷土の歩み」より）

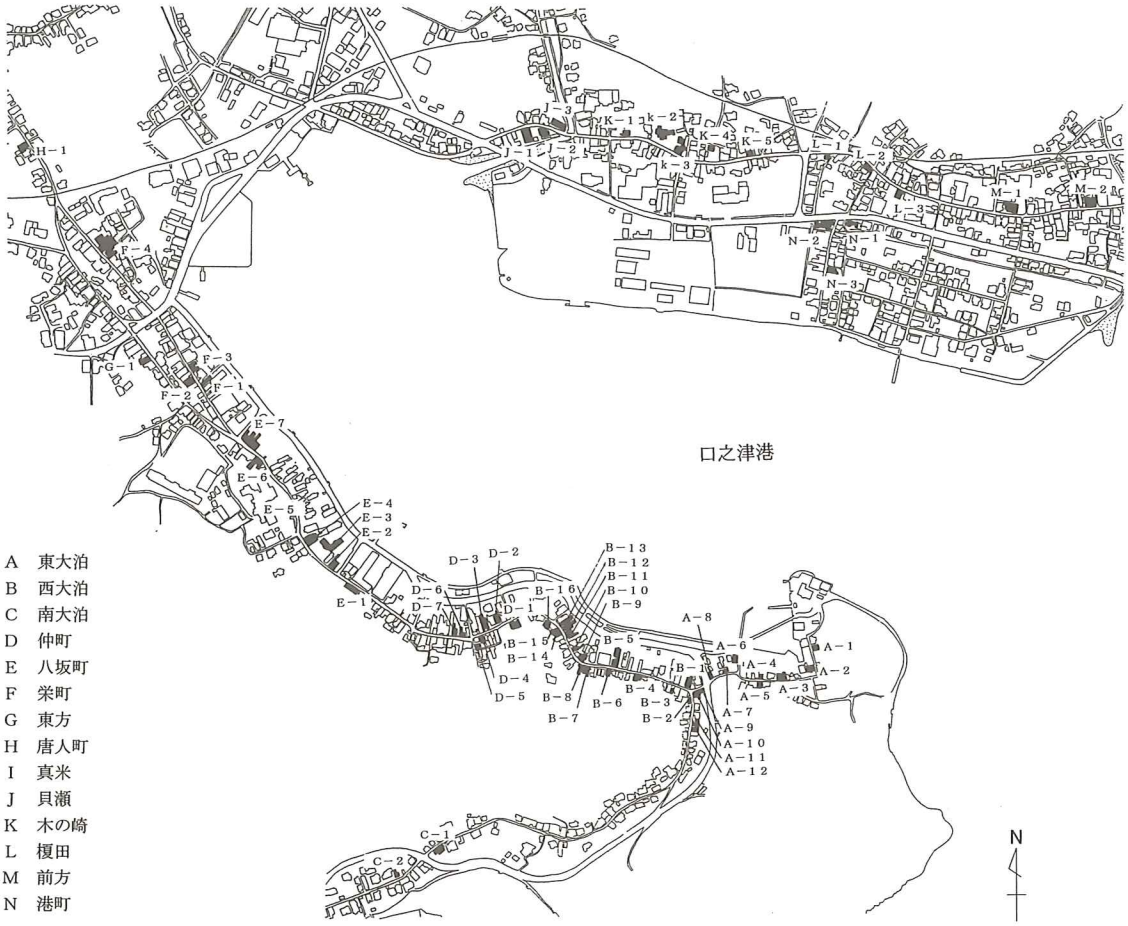

図２　調査建物分布図

表１　建築様態の地区別件数

地区名	和　風	洋　風	合　計
東　大　泊	10	2	12
西　大　泊	16	0	16
南　大　泊	2	0	2
仲　　町	7	0	7
八　坂　町	6	1	7
栄　　町	3	1	4
東　　方	1	0	1
唐　人　町	1	0	1
真　　米	0	0	0
貝　　瀬	2	1	3
木　の　崎	5	0	5
榎　　田	2	1	3
前　　方	0	2	2
港　　町	3	0	3
合　計	58	8	66

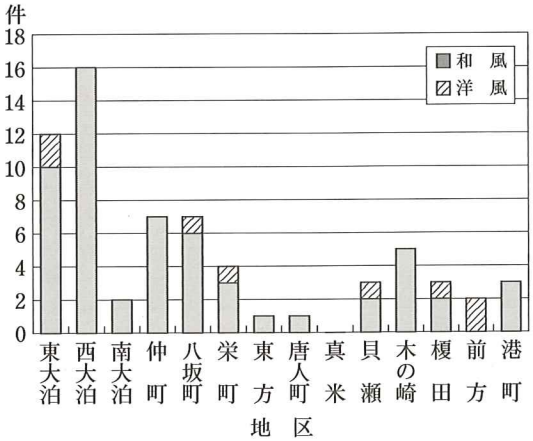

図３　建築様態の地区別件数

外に港の北側にも分布している。

調査建物の屋根形態をみると，入母屋屋根の形態が39件と圧倒的に多く，切妻屋根は19件，寄棟屋根は６件となっている。街道沿いに建物が並んでいるが，屋敷構えのある建物が目立ち，密度高く隣同士が軒を接するということはないので切妻屋根は少ない。洋風建築のほとんどは寄棟屋根となっていた。

表２　屋根形態の地区別件数

地区名	切妻屋根	入母屋屋根	寄棟屋根	その他	合計
東大泊	3	8	1	0	12
西大泊	3	11	2	0	16
南大泊	0	1	0	1	2
仲町	4	3	0	0	7
八坂町	1	6	0	0	7
栄町	1	2	1	0	4
東方	0	1	0	0	1
唐人町	1	0	0	0	1
真米	0	0	0	0	0
貝瀬	2	0	1	0	3
木の崎	1	4	0	0	5
榎田	2	1	0	0	3
前方	1	0	0	1	2
港町	0	2	1	0	3
合計	19	39	6	2	66

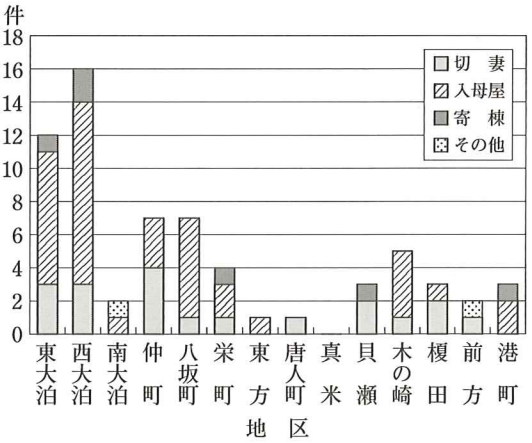

図４　屋根形態の地区別件数

３．特徴ある建築意匠

３－１　建築意匠の分布概要

建物各部の意匠を具体的にみてみる。屋根周りでは屋号，鏝絵(こてえ)，鬼瓦，破風飾り，懸魚(げぎょ)，軒では持ち送り，軒先漆喰，開放部では窓，格子，連子，揚戸，玄関，外観では外壁，煙突の計13種類の意匠を確認できた。

表３　建築意匠の地区別件数

地区名	屋号	鬼瓦	破風飾り	懸魚	持ち送り	軒先漆喰	窓	格子	連子	揚戸	玄関	外壁	煙突	合計
東大泊	4	2	3	1	0	4	0	2	0	0	0	5	0	21
西大泊	1	7	14	1	3	1	0	1	2	0	0	1	0	31
南大泊	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
仲町	0	0	4	0	2	2	0	0	0	1	0	1	0	10
八坂町	0	3	5	1	0	0	0	2	0	0	1	1	0	13
栄町	1	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	7
東方	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
唐人町	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
真米	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
貝瀬	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	3
木の崎	0	1	4	0	0	3	0	1	0	0	0	1	0	10
榎田	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	6
前方	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	4
港町	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
合計	8	17	37	5	5	11	4	8	2	1	1	16	1	116

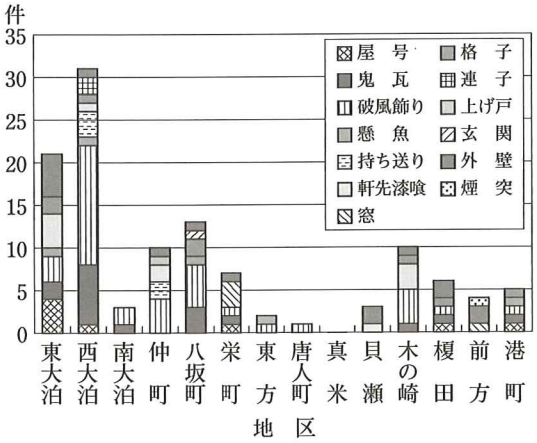

図5　建築意匠の地区別件数

意匠総数を地区別にみると，東大泊と西大泊の2つの地区に多くの意匠が残っていて，次いで八坂町，仲町，木の崎となっている。種類別にみると，屋号や鏝絵は東大泊に多い。鬼瓦と破風飾りは比較的多く見られる意匠だが，特に西大泊に多い。懸魚は少なく点在している。持ち送りは西大泊と栄町で見られる。軒先漆喰は東大泊に多い。特徴的な窓は栄町と前方で見られる。格子は東大泊と八坂町，港町に見られる。連子は西大泊だけに，揚戸は仲町だけに，特徴的な玄関は八坂町だけに見られる意匠である。外壁は各地区に見られる。煙突は前方だけに見られる。

3－2　屋号，鏝絵

屋号は店舗の宣伝のために，沿道建物の妻側や戸袋など，人目を引く目立つ場所に描かれている。明治頃は屋号を付けるのが流行っていて，どの家にも見られるものだった。しかし，現在はわずかに8件残るだけである。

鏝絵とは漆喰塗りによってつくる浮き彫りの絵である。民家の内と外を分ける壁から「魔」が入らないように「素朴な願いや魔よけ」を壁や戸袋に塗り込めていった。鏝絵は江戸末期に始まり，明治に入ってから全国に広まっていった。しかし，建築様式の変化により土蔵そのものが減少し，鏝絵も取り壊され，また描かれる機会やそうした技術を維持する左官職人もいなくなってきているので貴重な意匠となっている。

2階の入母屋屋根の妻部分に屋号が墨で描かれている。以前に商売をしていたことから付けられた。妻の屋号模様と鬼瓦の小粋な形態，破風漆喰塗り，軒裏波形漆喰の組合せが絶妙である（写真2）。

写真2　屋号（東大泊-7）

2階の戸袋に付けられた立体的な漆喰造りの屋号である。色漆喰を使って鮮やかに，「三國屋」の屋号が彩色で施されている。旅館の屋号ということである（写真3）。隣りに別館があり，「新三國屋」と趣の異なったデザインで仕上げられていて，看板への力の入れ様が伺える（写真4）。

写真３　屋号（東大泊-12）

写真４　屋号（東大泊-11）

２階入母屋屋根の両方の妻部分に，墨で三階松という先祖代々伝わる家紋が描かれている（写真５）。

写真５　屋号（榎田-3）

２階の妻部分にある布袋様の鏝絵である。にこやかな布袋様の担ぐ袋は水色，縛り紐は緋色の彩色が残っている。家門の繁栄を願って彫られている。以前は「天満屋」という旅人宿兼汽船問屋だった。妻部分の鏝絵は，破風漆喰と軒裏の波形漆喰仕上げも組み合わされて建物の正面を飾っている。現在，空き家になっている（写真６）。

写真６　鏝絵（西大泊-2）

２階の戸袋にある長寿の願いを込めた鶴亀の鏝絵である。松の木，太陽，海の波も描かれている。鶴，亀，波，松の幹は立体感が出ていて，鶴は赤，黒，亀は桃色，海は水色，松の幹は茶色，松葉は群青色，太陽は色に着色されている。匠なのはこれらを絵に見立てて，洋風の額縁，支えもまた漆喰仕上げとしていて，鏝絵職人の力溢れる作品となっている（写真７）。

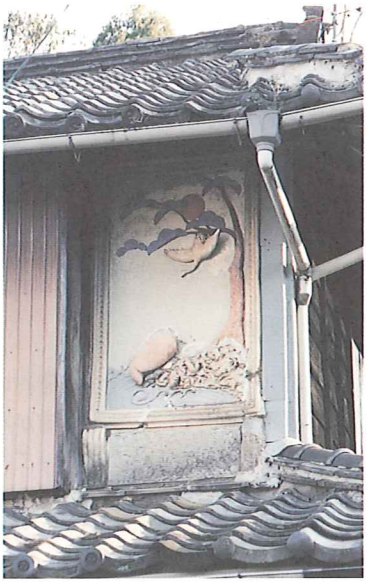

写真７　鏝絵（東大泊-1）

３－３　鬼瓦，破風飾り，懸魚

鬼瓦は屋根棟の端を覆うために装飾的に用いる瓦で，昔は魔除けのために鬼面を用いたことから

この名が付いたとされるが，口之津港の和風建築では鬼瓦に苗字や大黒様を入れたりして，装飾的な意味を強めている。

破風飾りは，破風板に漆喰で細かい彫刻や立体的な飾りが付けられている。本来は雨仕舞の水切り装飾であるが，口之津港ではそれ以上に装飾性を強めている。

懸魚は，社寺建築において破風の拝みの下や母屋の小口当たりに付ける飾りである。形によって多くの種類があり，城郭建築や民家にも付けられることが稀にあった。ここでは独自の装飾に特徴がある。

にこやかな大黒様の鬼瓦である（写真８）。

写真８　鬼瓦（東大泊-7）

鬼瓦に「山崎」と自分の姓を入れて，表札代りにしている（写真９）。

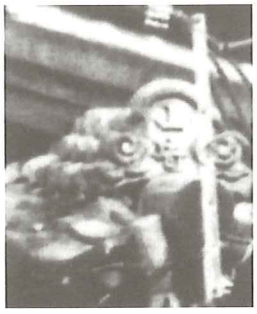

写真９　鬼瓦（西大泊-13）

漆喰で作られた立体的な破風飾りである。棟先瓦の位置に扇形の漆喰を施して白地に赤色の日の丸の彩色をしている。遊び心満点の鏝絵である（写真10）。

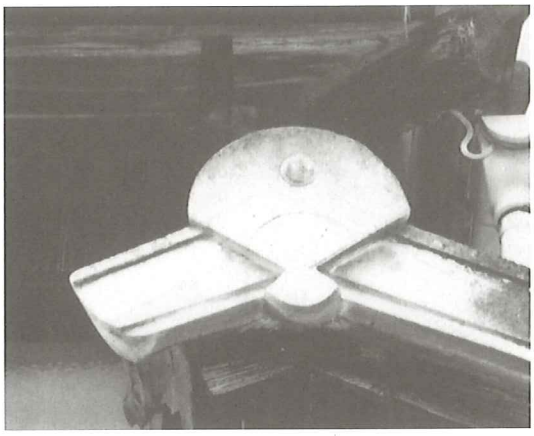

写真10　破風飾り（西大泊-1）

漆喰の破風飾りで，細かな模様の造形が施されている（写真11）。

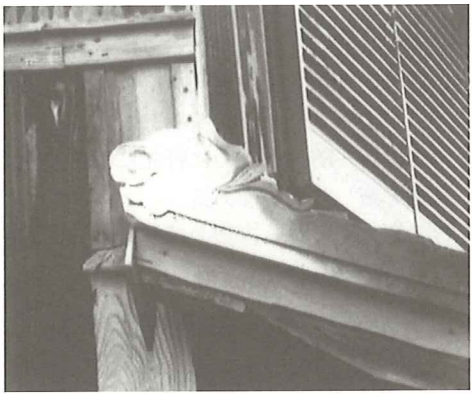

写真11　破風飾り（西大泊-2）

洋風に見せかけた網代組みのある玄関ポーチ上部の妻に取り付けられている木製懸魚で，菊の花と波をモチーフにした透かし模様が彫られている。破風飾りと鬼瓦の漆喰仕上げが丁寧である（写真12）。

写真12　懸魚（西大泊-12）

3－4　持ち送り，軒先漆喰

持ち送りは，庇や出窓の突出する部分を支えるために，壁や柱などに取り付ける板材や斜め材のことである。彫刻などの意匠を凝らしたものもある。

軒先漆喰は，防火のために軒先に漆喰を塗り込めて意匠を施したものである。

１階の軒庇を支える木製の持ち送りで，彫刻が施されている（写真13）。

写真13　持ち送り（西大泊-10）

１階の軒先から軒裏にかけて漆喰でデザインされている。軒裏の垂木間隔についた波形の造形が軽やかである（写真14）。

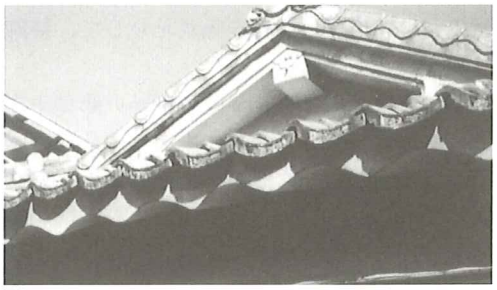

写真14　軒先漆喰（仲町-5）

軒先漆喰があるが，保存状態が悪く崩れかかっている（写真15）。

写真15　軒先漆喰（木の崎-5）

3－5　窓，格子，連子，揚戸，玄関

建物の開口，出入口に関する窓，格子，連子，揚戸，玄関の建築意匠については，ほとんどが港の南側の通り沿いの建物にみられる。

窓は和風の形式に加えて，新しく開き戸や上げ下げ戸の形式も出てきて，意匠を凝らしている。

格子は建物１階部分の表通り側に設置され，細い木や竹を目透かしに組んで，目隠しや盗難防止のために窓に取り付けた。

連子は建物２階正面部分にあって，手摺を持ち出し，表通りを眺めたり涼んだりできる。２階部分も幅広く開放的な造りとなっていて，長崎の伝統的住宅の特徴の一つとなっている。

揚戸は通りに面する戸口に設けられた雨戸で，上下に開閉する戸である。民家の表戸口などに多く，柱の竪溝に戸板を垂直に滑らせて上げ，栓や金物で止め，夜はこれを下ろすものである。

玄関は新しくテラゾー造りの形式が導入された。

2階漆喰壁に，ガラス戸と鉄製両開き扉が付けられている（写真16）。

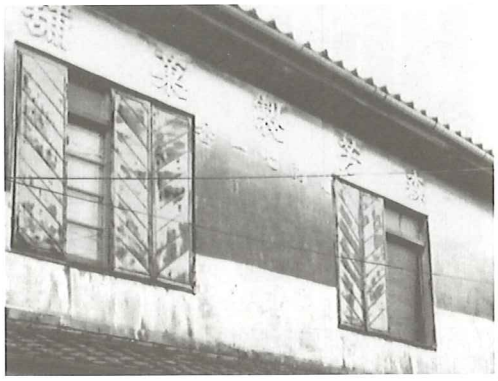

写真16　両開き窓（栄町-2）

洋風建築に多い上げ下げ窓である。操作が容易である（写真17）。

写真17　上げ下げ窓（前方-1）

1階の窓に取り付けられた千本格子である。下見板張りの外壁と組み合わされて，格子窓の位置も塀の高さに揃えられていて近代的和風の意匠構成が感じられる（写真18）。

写真18　格子（港町-3）

建物2階部分を建物幅全体に持ち出して連子を取り付け，連子下部分を持ち送りで支えている（写真19）。

写真19　連子（西大泊-4）

妻側を表通りに面した建物配置で，揚戸形式の出入口となっている（写真20）。

写真20　揚戸（仲町-7）

洋風と和風が混ざり合った病院建築である。洋風の玄関ポーチがあり，入口玄関はテラゾー造りとなっている（写真21）。

写真21　玄関（八坂町-6）

3－6　外壁，煙突

外壁の種類として，煉瓦壁，海鼠（なまこ）壁，漆喰壁，タイル壁，板壁が確認できた。

煉瓦壁は隣家との境に防火対策のために設けられ，外観を飾ることにも役立った。

海鼠壁は土蔵に多く見られる。潮風や暴風雨などから保護するために平らな海鼠瓦を貼り付けた大壁の技法である。

漆喰壁は煉瓦壁と同様に防火対策，美観のために設けられた。

タイル壁は雨仕舞を良くするために設けられている。一種の貼り瓦である。

洋風建築では外壁は全て下見板張壁で，煙突も取り付けられ景観の重要な要素となっている。

隣家側の壁は煉瓦壁で造られて，防火対策となっている（写真22）。

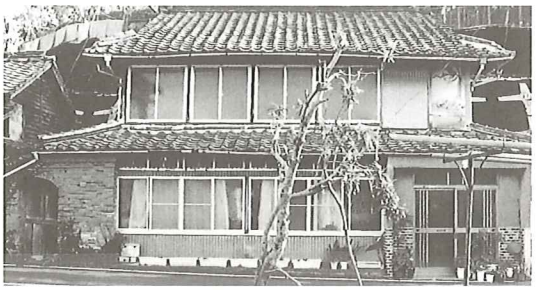

写真22　建物左側に煉瓦壁（東大泊-1）

土蔵の妻側に見られた海鼠壁。以前は米倉であった。鉄扉，庇，破風塗仕上との取り合わせが美しい（写真23）。

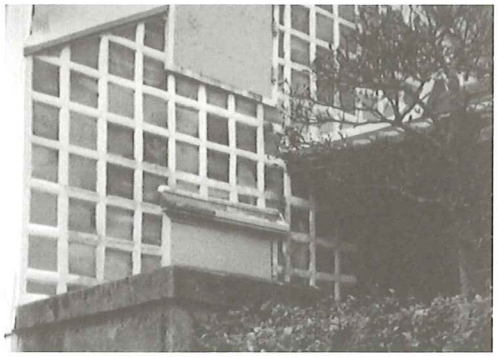

写真23　海鼠壁（八坂町-2）

洋風建築では下見板張壁にペンキ塗仕上げが一般的である。窓枠に相当する縦横の線が壁面を効果的に引き締めている（写真24）。

写真24　下見板張壁（貝瀬-2）

1階の腰部分にタイル張がある。雨仕舞が良い（写真25）。

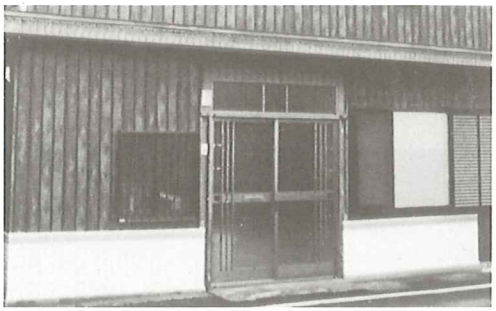

写真25　タイル張壁（西大泊-3）

2階建て洋風建築の棟中央にマントルピースの煙突が設けられ，煙出しの穴が付いている（写真26）。

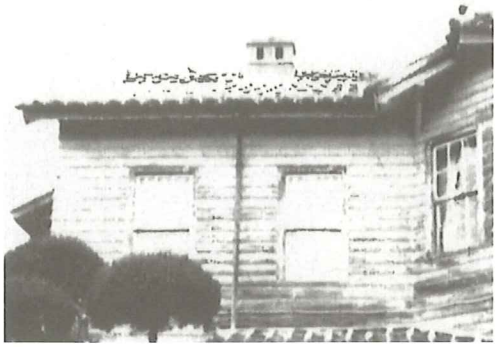

写真26　煙突（前方-1）

3－7　塀

特徴的な塀として，煉瓦塀，石塀，板塀の３種類が見られた。

塀の分布をみると，煉瓦塀は港の南側の八坂町，栄町，東方地区に集中しているのが分かる。南側の地区は以前，公共の建物が多かったので，煉瓦塀が建設される機会に恵まれたと考えられる。石塀は八坂町と木の崎に多く見られた。板塀も八坂町と木の崎に見られるが，数は少ない。

表４　塀の地区別件数

地区名	煉瓦塀	石　塀	板　塀	合　計
東大泊	1	0	0	1
西大泊	2	0	0	2
南大泊	1	0	0	1
仲町	0	0	0	0
八坂町	4	2	1	7
栄町	3	0	0	3
東方	5	0	0	5
唐人町	0	0	0	0
真米	0	0	0	0
貝瀬	0	0	0	0
木の崎	0	3	1	4
榎田	0	0	0	0
前方	1	0	0	1
港町	0	0	0	0
合　計	17	5	2	24

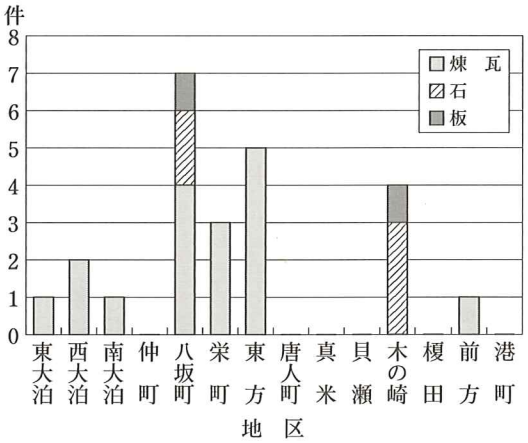

図６　塀の地区別件数

図7　塀の分布図

(1)　煉瓦壁

煉瓦壁は強度を確保するために積み方がいろいろ工夫されている。日本では明治10年代までフランス積みが多く見られたが，明治20年代以降はイギリス積みが主流になった。フランス積みは，各段の表面に長手面と小口面が交互に並ぶ積み方である。壁の内側に目地が垂直に通る部分が出来るので地震に弱いとされている。イギリス式は長手面の段と小口面の段が平面の表面に交互に表れる積み方である。口之津港では明治期の商社，銀行建築の塀の建設に煉瓦が使用された。

イギリス積みの煉瓦塀である。煉瓦1枚半の厚みで，上端部は意匠的な煉瓦組みとしている。以前は，三井物産の倉庫を仕切ったものだった（写真27）。

写真27　煉瓦塀（東大泊-1）

フランス積みの煉瓦塀である。柱梁に相当する厚みをとって構造補強されている。以前は銀行であった（写真28）。

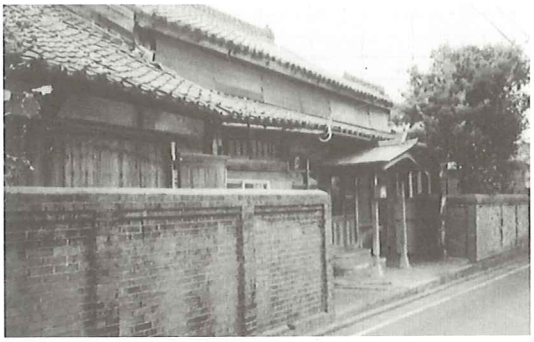

写真28　煉瓦塀（東方-5）

邸宅周囲の石塀で，乱石積み，面取りが施されている（写真29）。

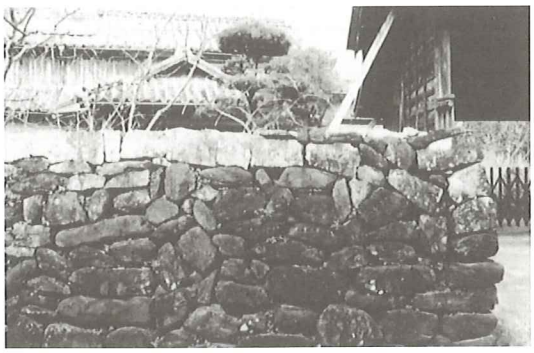

写真29　石塀（木の崎-1）

建物と表通りの境の板塀で，通風を良くするために隙間を空け，体裁よく設置されている（写真30）。

写真30　板塀（八坂町-4）

ま と め

口之津港が明治大正期に貿易港として発展していた頃は，税関，三井物産支店，銀行，遊郭，移住地の建築が町並みを豊かにしていた。港周辺には明治，大正，昭和初期以前の建物が60棟余り確認できた。建築意匠に様々な種類が見られるのが特徴的で，建築意匠のユニークさでは優れたものがある。中でも鏝絵は代表的なもので，他にも洋風建築，煉瓦塀など，当時の繁栄のあとを物語っていた。

最盛期の建物数はもっとあったであろうが，記録に留める意味でここにまとめた。資料収集にお世話になった口之津町歴史民俗資料館に感謝いたします。

（注）

(1) 平成９年度卒業研究「長崎県南高来郡口之津町の町並み調査」1998年２月，大城南海，滝下理津子，長崎総合科学大学建築学科村田研究室ゼミ

（参考文献）

(1) 「口之津町史　郷土のあゆみ」昭和堂印刷
(2) 「南蛮史料の研究」風間書房
(3) 「消えゆく左官職人の技　鏝絵」小学館

表5　建築意匠調査表（長崎県南高来郡口之津町）

番号	調査番号	建物名	建築様態	屋根形態	屋号	鬼瓦	破風飾り	懸魚	持ち送り	軒先装飾	窓	格子	連子	揚戸	玄関	外壁	煙突	合計
1	東大泊－1	佐々木宅	和	入母屋	○											○		2
2	東大泊－2	村上宅	和	入母屋			○	○										2
3	東大泊－3	山崎宅	和	切妻						○		○						2
4	東大泊－4	野澤宅	和	寄棟												○		1
5	東大泊－5	山下宅	和	入母屋						○								1
6	東大泊－6	渡辺宅	和	入母屋		○												1
7	東大泊－7	松林宅	和	入母屋	○	○				○								3
8	東大泊－8	小山宅	洋	入母屋												○		1
9	東大泊－9	不詳	洋	入母屋								○				○		2
10	東大泊－10	平宅	和	切妻			○			○								2
11	東大泊－11	不詳	和	入母屋	○		○											2
12	東大泊－12	寺田宅	和	切妻	○											○		2
13	西大泊－1	永野宅	和	入母屋			○											1
14	西大泊－2	不詳	和	入母屋	○	○	○			○		○						5
15	西大泊－3	青木宅	和	入母屋			○									○		2
16	西大泊－4	西島宅	和	寄棟					○				○					2
17	西大泊－5	本田宅	和	入母屋			○						○					2
18	西大泊－6	不詳	和	切妻			○											1
19	西大泊－7	永野宅	和	入母屋			○		○									2
20	西大泊－8	成末宅	和	切妻		○	○											2
21	西大泊－9	松尾宅	和	入母屋			○											1
22	西大泊－10	高橋宅	和	入母屋		○	○		○									3
23	西大泊－11	永野宅	和	入母屋		○	○											2
24	西大泊－12	南宅	和	寄棟		○	○	○										3
25	西大泊－13	山崎宅	和	入母屋		○	○											2
26	西大泊－14	菊田宅	和	切妻			○											1
27	西大泊－15	井関宅	和	入母屋			○											1
28	西大泊－16	橋田宅	和	入母屋		○												1
29	南大泊－1	相川宅	和	入母屋		○	○											2
30	南大泊－2	三宅宅	和	その他			○											1
31	仲町－1	長野宅	和	入母屋					○									1
32	仲町－2	甲斐田宅	和	切妻					○							○		2
33	仲町－3	松尾宅	和	入母屋			○											1
34	仲町－4	山崎宅	和	切妻			○											1
35	仲町－5	森北宅	和	入母屋			○			○								2
36	仲町－6	山下宅	和	切妻			○											1
37	仲町－7	大原宅	和	切妻						○				○				2
38	八坂町－1	富永宅	和	入母屋			○											1
39	八坂町－2	森宅	和	切妻												○		1
40	八坂町－3	哲翁宅	和	入母屋			○	○										2
41	八坂町－4	不詳	和	入母屋		○	○											2
42	八坂町－5	鶴田宅	和	入母屋			○					○						2
43	八坂町－6	植木宅	洋	入母屋		○									○			2
44	八坂町－7	植木宅	和	入母屋		○	○					○						3
45	栄町－1	久保宅	和	入母屋			○											1
46	栄町－2	森宅	和	入母屋	○						○							2
47	栄町－3	塩田宅	和	切妻							○							1
48	栄町－4	田口宅	洋	寄棟		○					○					○		3
49	東方－1	兼俵宅	和	入母屋			○	○										2
50	唐人町－1	小柳宅	和	切妻			○											1
51	貝瀬－1	三喜工業	和	切妻												○		1
52	貝瀬－2	鶴田宅	洋	寄棟												○		1
53	貝瀬－3	農協倉庫	和	切妻						○								1
54	木の崎－1	内田宅	和	入母屋			○											1
55	木の崎－2	石田宅	和	入母屋		○	○											2
56	木の崎－3	加納宅	和	入母屋			○			○		○						3
57	木の崎－4	森宅	和	入母屋			○			○						○		3
58	木の崎－5	平宅	和	切妻						○								1
59	榎田－1	松村宅	洋	切妻												○		1
60	榎田－2	荒木宅	和	切妻		○						○				○		3
61	榎田－3	岡野宅	和	入母屋	○		○											2
62	前方－1	松浦宅	洋	その他							○					○	○	3
63	前方－2	八木宅	洋	切妻												○		1
64	港町－1	八木宅	和	入母屋	○													1
65	港町－2	本多宅	和	寄棟			○											1
66	港町－3	松尾宅	和	入母屋		○		○				○						3
合計					8	17	37	5	5	11	4	8	2	1	1	16	1	116

（平成9年10月調査）

表6　塀の調査表（長崎県南高来郡口之津町）

番号	調査番号	建物名	塀の種類	積み方	塀の高さ(cm)	塀の厚さ(cm)	現在の用途	過去の用途
1	東大泊－1	植松宅	煉瓦	イギリス積		34	住宅	三井倉庫
2	西大泊－1	南　宅	煉瓦		115	12	住宅	住宅兼病院
3	西大泊－2	笹田宅	煉瓦	イギリス積	166	24	住宅	油屋
4	南大泊－1	天理教	煉瓦	イギリス積	140	23	教会	教会
5	八坂町－1	大原宅	煉瓦	フランス積	105	10	住宅	役場
6	八坂町－2	植松宅	煉瓦	フランス積	135	10	住宅	役場
7	八坂町－3	森　宅	石	乱石	155	30	住宅	米屋
8	八坂町－4	不　詳	板				住宅	不詳
9	八坂町－5	金光教	煉瓦	イギリス積	174	15	教会	教会
10	八坂町－6	植木宅	煉瓦	フランス積	212		住宅	住宅
			石	切石	220			
11	栄　町－1	松尾宅	煉瓦	イギリス積	145	15	住宅	住宅
12	栄　町－2	村本機材	煉瓦	イギリス積	166	30	住宅兼店舗	不詳
13	栄　町－3	田口宅	煉瓦	イギリス積	166	30	住宅	住宅
14	東　方－1	畑田宅	煉瓦	フランス積	154	20	住宅	住宅
15	東　方－2	竹口宅	煉瓦	フランス積	154	20	住宅	住宅
16	東　方－3	網戸宅	煉瓦	フランス積	82	20	住宅	文房具店
17	東　方－4	吉田宅	煉瓦	フランス積	110		住宅	住宅
18	東　方－5	石本宅	煉瓦	フランス積	162	20	住宅兼店舗	銀行
19	木の崎－1	内田宅	石	乱石	118	70	住宅	住宅
20	木の崎－2	石田宅	石	乱石	135，178	95	住宅	住宅
21	木の崎－3	森山宅	石	乱石	127，140	75	住宅	住宅
22	前　方－1	松浦興業	煉瓦	フランス積	315	45	住宅兼店舗	住宅

（平成9年10月調査）